

整形外科外来だより

No 15 2009/06/01 けいゆう病院 整形外科 発行

◆久しぶりの整形外科外来だよりです◆

しばらく間が空いてしまいましたが、外来だよりを再開致します。担当も鎌田から内田になりました。皆様にお知らせや参考になるトピックスなどをお伝えしていこうと思っております。ご意見などがございましたら、遠慮なくお申し出ください。

◆当科の医師を紹介します◆

改めて当科の医師のご紹介をさせていただきます。部長兼副院長の鎌田(専門は脊椎・脊髄 以下同じ)、医長兼リハビリテーション科副部長の千葉(関節外科、人工関節)の2人は当院に10年近く勤務しており、当科の‘顔’とも言える存在です。一昨年からは廣瀬(脊椎・脊髄)が、昨年からは内田(膝、下肢)、堀内(整形外科一般)が赴任しました。そして、この4月からは日方(脊椎・脊髄)が赴任しました。現在この6名で外来と入院患者さんの対応をしております。

おかげさまで当科での治療を希望される患者は引きもきらず、その反面、皆様のそのご要望に十分対応するにはまだ人員不足という感が否めないというのが正直なところです。物理的な制約のために皆様のご要望に添えずご迷惑をおかけすることもしばしばで大変恐縮ですが、できるだけの対応を心掛けておりますので、何卒宜しくお願い申し上げます。

◆半月板のお話 —どうして半月板は存在するのか?—◆

今回は膝の話です。膝には半月板というものが存在します。半月板は“C”字型をした軟骨であり、大腿骨と脛骨の間に、内側と外側に分かれて挟まっています。関節内に独立して存在する構造物はほかの関節には存在しないという点で、表題のように半月板は極めて特殊な存在であると言えます。役割としては、荷重の分散やクッションの役割をしています。荷重の分散とは、できるだけ広い面積で重さを支えようとする事で、半月板に特異的な役割と言えます。例えて言うと、50人で担ぐお神輿を、半月板があることで100人で支えることになり、より長持ちすることになります。

では、半月板がなかったとしたらどういうことになるでしょう。前述の反対、すなわち膝関節はより早く消耗してしまうことになります。専門的には、早期に(二次性)変形性関節症が生じると言います。では、最初から半月板なしで広い面積を得ようと骨の形を作っておけばいいわけですが、そうしてしまうと可動域の減少、平たく言えば正座ができる程に曲げられない膝になってしまいます。ということで、半月板は膝の2つの条件、荷重と可動域を両立する大事な構造物なのです。

今回は半月板の病気、すなわち半月板損傷についてお話しいたします。

(文責 内田尚哉)